慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古版経済書解題 仏蘭西共和国第三年版マリー・ジャン・アントアーン・コンドルセー遺著 人類精神進歩の歴史画下図
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.9 (1939. 9) ,p.1215(67)- 1242(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19390901-0067
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390901-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

だに斯くの如き中世的見解が固執されたのであつた。（昭和十四年九月一日）

古版經濟書解題

佛蘭西共和國第三年版マリー・ジャン・アントアーン・コンドルセー遺著

『人類精神進歩の歴史畫下圖』

高橋誠一郎

一

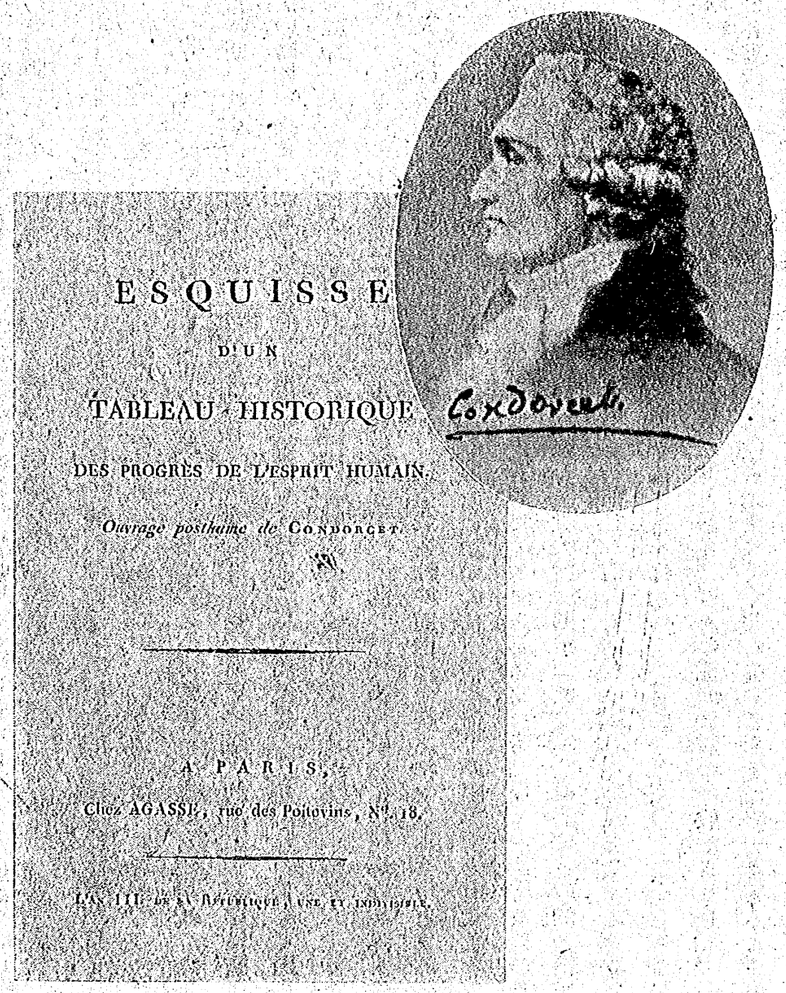
コンドルセー（Marie-Jean-Antoine-Nicolas Caritat, Marquis de Condorcet）の遺著『人類精神進歩の歴史畫下圖』（Esquisse d'un Tableau Historique des progrès de l'esprit humain. Ouvrage posthume de Condorcet.）は固より純然たる經濟書と目せらる可きものではないが、而も、此の書がウイリアム・ゴッドウィンの『政治的正義』と共に、トーマス・ロバート・マルサスをして其の『人口論』を起草せしむるの機會を與へたばかりでなく、英國功利主義經濟學者の意見に影響する所極めて大であり、且つ、サン・シモン及びフーリェ等佛國空想的社會主義者の思辯に對して示唆を與ふること深甚なりし事實等に由つて、之れを『古版經濟書解題』中に於いて紹介するは、必ずしも不當ではなからうと思はれる。然じながら、吾人は本書に就いては、既に昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷二二二頁より五頁に亙つて說述する所があり、又、其の前、本誌第二十九卷第六號に登載せるサルウィン・シャ

ピロ氏著一千九百三十四年版『コンドルセーと自由主義の興起』を紹介するに當つても、此の書に就いて云々する所があつたので、玆には出來得る限り重複を避け、著者の略歴、著作の由來等は之れを省略し、主として其の內容に就いて解說することゝする。

二

此の書は、出版者の端書（Avertissement）の外、無題の緒言的論述に次いで、第一期「人間の土族的結合」「Les hommes sont réunis en peuplades.」、第二期「遊牧民。這般の狀態より農業民への推移」、第三期「アルファベット文字の發明に到る迄の農業民の進步」、第四期「亞歷山時代頃に於ける科學分割に到る迄の希臘に於ける人間精神の發達」、第五期「其の分割より其の衰頽に到る科學の進步」、第六期「十字軍時代頃に於ける其の復興に到る迄の學問の衰頽」、第七期「西洋に於ける其の復活期頃に於ける科學の最初の進步より印刷術の發明に到る迄」、第八期「印刷術の發明より科學及び哲學が權威の羈絆を排除せる時期に到る迄」、第九期「デカルトより佛蘭西共和國の成立に到る迄」、第十期「人類精神の將來の進步」より成るものである。

コンドルセーは、本書中に於いて、第十八世紀佛蘭西哲學者の間に流れて居つた近世的社會進步の思想、即ち人間性の無限の成全性の理論を熱情と確信とを表明した。ブリュンチエール（Ferdinand Brunetière）に從へば、第十八世紀の全文學史を支配する進步の思想は、先づペロー（Charles Perrault）によつて其の Dialogues 中に表明せられたる限定せられた意見を以つて始まり、徐々に擴張せられて、遂にはコンドルセーの夢の限りなき豫想に終るのである。（Brunetière, Études critiques sur la littérature française, 5e série, 1893, p. 183.）ブリュンチエールの言を以つてすれば、近代を以つて古代に優るものと主張せるペローの Parallèle des anciens et des modernes,



コンドルセー侯肖像、自署並びに『人類精神進步の歷史的繪畫下圖』初版の扉

1688-1698. は第十八世紀文學史の眞始源を表示するものであり、コンドルセーの Esquisse は其の終末を劃するものである。(ibid.)。

コンドルセーは本書の劈頭に於いて、人類の進歩は「我れ等の能力の個人的發達に於いて觀察せらるゝと等しき一般法則に從ふものである。即ち、そは結んで社會を成せる多數の個人に在つて同時に考察せられたる發達其の者の結果なるが故である。而も、あらゆる隣間の現示する結果は、之れに先き立てる隣間の其れに依存し、而して之れに次げる時期の其れに影響する」と。(Esquisse, op. cit., p. 3.)。斯くて歴史的繪畫は變化の順序を表示し、あらゆる過去の時期が次ぎの時期に及ぼせる影響を説明し、從つて又、人間種屬が其の無數の世紀を通じての不斷の更新に於いて經驗したる變革によつて、其の辿れる進路と知識若しくは幸福に向つて其の進めたる歩みとを明かにす可きである。コンドルセーは推理に由り、又事實に徴して、人間の諸能力の改善には何等の境界も設けらるゝことなきこと、人間の成全性は實際に無際限なること、這箇成全性の前進は今後之れを阻止せんとするあらゆる力より獨立せるものであつて、自然が吾人を置ける地球の壽命を除いては、他に何等の限界をも有せざることを立證せんと企圖したのである。疑ひもなく這般の進歩は速度を異にすることある可きも、而も、少くも此の世界が宇宙の系統中に於いて同一の位置を占め、而して這般の系統の一般的諸法則が、此の地球の上に一般的顚覆を生ぜしむることも、又、最早人類をして、持續し、同一の能力を行使し、而して同一の資源を發見することを許さゞるが如き變化を來さしむることもない間は、そは斷じて後退することを得ない。(ibid., p. 4.)。

コンドルセーは進歩に對する障碍を以つて偏見なりと觀る。吾人の能力發達の一般法よりして、一定の偏見が吾人の進歩の各階段に於いて必然發生し、猶ほ該階段を越えてよく其の魅力若しくは勢力を張ることが認められる。

盡し、是れ等の謬想を破棄するに必要なる眞理が承認せられて後も、長く、人々は其の幼時、其の國家及び其の生活する時代の謬想を保持するが故である。(ibid., p. 16.)。略言すれば、總べての國土に於いて、又總べての時期に在つて、人々の相異れる階級の教育程度に從ひ、又彼れ等の職業に從つて、種々なる偏見が存する。人類將來の改善を豫見し、又這般の改善を指導し促進するの技術にして眞に存在するならば、既に成されたる進歩の歴史は、斯くの如き技術の第一の基礎を形成しなければならぬ。(ibid., p. 17.)。吾人の偏見及び其の結果たる害惡は、其の泉源を、吾人の祖先の偏見に發する。是れ等のものゝ起源及び結果を啓示するは、吾人の偏見に關する迷妄を解き、害惡を防止する最確實なる道である。(ibid., p. 18.)。

彼れは九期に分つて人類の歴史を物語る。

三

コンドルセーは古代に於けるアリストテレース、近代に於けるダーウィン及びウェスターマーク (Edward Alexander Westermark) と等しく、最初の人間社會が親子より成る家族であつたこと、並びに長期に亙れる兩親の注意を必要ならしめた生兒の長き幼年期が結婚制度及び道德的情操發達の第一泉源であつたことを主張する。容易に生活し得る土壤の上に居を定めた家族は、後に到つて增殖し、土族 (peuplade) と爲ることがあつたであらう。(ibid., p. 21-22.)。武器を製造し、食物を調理し、這般の調理に要する厨具を取得し、新たなるものを取得すると能はざる季節の爲めの蓄へとして是れ等の食物を保存する術の如き、最も單純なる欲望に充てられた技術は、持續的集合の最初の成果であり、又人間社會を、動物の多くの種屬に在つて形成せらるゝ社會より區別する第二の特質である。(ibid., p. 22.)。

斯くの如き土族の或るものに在つては、婦人は小屋の周圍に於いて、榮養に資し且つ狩獵及び漁撈の產物を補充する植物を耕作する。大地が自然に植物性榮養物を生ずる地方に形成せられた他のものに於いては、之れを搜し索め又採集するの注意が野蠻人の時間の一部を占める。(ibid., p. 23.)。而も、要するに、文明の最初の狀態は、其の武器及び岩干の家具を製作し、又住所を建て若しくは掘るの粗笨なる技術を除いては、何等の技術をも知ることのない狩獵及び漁撈によつて生存しつゝある少數の人々の社會の其れである。然しながら、彼れ等は既に彼れ等の欲望を傳達するが爲めの言語と彼れ等の行爲の一般準則が引かるゝ少數の道德觀念を有し、家族の中に生活し、法律の代用を爲す一般的習慣に服し、又、幼稚なる政治形態を有して居つたのである。(ibid., p. 5.)。

第二期は、食料及び衣料の更らに大なる高に對する要求に應ずるが爲めに動物を馴養するを以つて特徵とする。(ibid., p. 30.)。各家族の家畜は平等に增加することを得なかつたが爲めに、富の相違が生ずることゝ爲つた。是に於いて乎、或る人が、何等の家畜をも有することなく又是れ等のものゝ必要とする注意を行ふが爲めに其の時と力とを捧ぐ可き他の者と、其の家畜の所產を分割するの道が案出せられた。是に於いて、若くして體格優れたる個人の勞働は其の生存に取つて正確に必要なる費用以上の價値を有することが發見せられ、而して戰爭の捕虜を殺すことなくして、之れを奴隸として保留するの習慣が發生した。(ibid., p. 32.)。

種々なる欲望滿足に使用せらるゝ物品、之れを準備するに役立つ道具が多樣の度を增し、是れ等のものゝ分配が不平等の度を加へたことは、交換を增加し、而して眞正の商業を產んだ。そは共通の尺度、一種の貨幣の必要を感ぜしむることゝなくして擴張せらるゝことを得なかつた。(ibid., p. 33.)。土族は一層多數と爲つた。同時に一層容易に其の家畜を飼養するが爲めに、其の住居は、定著せられた際には一層分離せしめられ、或ひは又、彼れ等の馴致せる動物の一定種をして重荷を馱し若しくは牽くの用に供することが發見せらるゝと共に、其の住居は可動的野營に變ぜしめらるゝのである。(ibid., p. 33-34.)。多數の家畜、大勢の奴隸を所有し、より貧困なる人民の夥しき數を自己の用に使用せる家族 (famille) の首長は、其の部族 (tribu) の首長の權威を享受し、同樣に斯くの如き者は又民族 (nation) の首長の其れを享受する（少くとも、年齡、經驗、勳功に基ける尊敬が彼れ等に名望を與へたる時には)。(ibid., p. 34.)。財產及び其の權利に關する觀念は、一層大なる範圍と明確性とに到達した。相續財產の分割は一層重要と爲つたが爲めに、之れを確定的準則に服せしむるの必要が存した。(ibid., p. 35.)。家畜に對し、他のものに比して一層優良なるか若しくは豐富なる糧秣を與ふる一定植物の發見に由つて農業は興る。(ibid., p. 37.)。豐沃なる地方、惠まれたる氣候に於いては、土地の同一面積は、穀物に於いて、果實に於いて、茶根に於いて、牧場として使用せらるゝ場合よりも、多數の人々を養ふ所のものを生產する。從つて、土壤の性質が這般の耕作をして餘りに困難ならしむることのない場合、牧畜民によつて旅行用若しくは運搬用に供せられたと同一の動物を之れに使用するの方法が發見せられた場合、農具が或る程度の完成を見た場合には、農業は最も豐富なる生活資料の泉源、人民の第一の仕事と爲り、而して人類は第三期に到達する。(ibid., p. 38.)。

四

著者は第三期に於いて、アルファベット文字の發明に到る迄の農業民の進步を叙する。農業は人間を其の耕作する土壤に束縛する。(ibid., p. 43.)。各々の土地は主人を有し、其の果實は唯り彼れにのみ屬する。之れを準備せる人及び動物の生存及び維持に必要なる費用以上に出でたる收穫は、地主に、彼れが如何なる勞働によつても購ふの要なき年々の富を提供する。前記兩社會狀態に在つては、あらゆる個人、少くともあらゆる家族は、殆んど總べ

ての必要なる技術を行つた。然るに、勞働を行ふことなくして其の土地の收益によつて生活する人々と、是れ等の人々によつて支拂はるゝ賃銀を以つて生活する他の者とが存し、勞働が多樣と爲り、技術の過程が一層廣大且つ一層複雜と爲つた時、共同の利益は軈がて分割を强要した。個人の勤勞がより少數の目的物に對して行使せらるゝ時には、一層完成せらるゝの事實が明かと爲つた。(ibid., p. 44.)。斯くて、一部の人々は農業勞働に從事し、他のものは道具を製作した。家畜の注意、家內經濟、被服類の調製は、同樣に、別箇の業務と爲つた。軈がて諸技術に使用せらるゝ實體が增加し、而して其の本質が相異れる取扱法を要求すると共に、此の點に於いて類似するものは別箇の部類を形成し、其の各々は特別階級の勞働者を有するに至る。商業は擴張して、更らに多數の物品を抱擁し、而して更らに廣大なる地域よりして之れを取得した。斯くして又、其の唯一の業務が、保存し、輸送し、利潤を收めて再賞するが爲めに貨物を購入するに在る他の階級が形成せられた。(ibid., p. 45-46.)。

此の第三期は社會的、宗教的及び政治的制度が確然樹立せられた時期であつた。吾人が封建制度の起源を認め得るのも亦、此の時期である。そは「我れ等の風土に特有なるもので、はなくして、文明の同一時期に於いて、又、戰勝によつて世襲的不平等を確立せられた二個の人民によつて同一地域が占領せられた際には、常に、此の地球の殆んどあらゆる他の部分に於いても、看出さるゝ災害である」。(ibid., p. 55.)。

第四期の全部は希臘人に關する論述である。自己を神々の子と呼んで、其の憤怒と其の罪惡とによつて人類を辱しめた諸王を嫌つて、希臘人は諸共和國に分割せらるゝに至つた。(ibid., p. 74.)。僧侶の職務は諸神の禮拜に限定せられ、斯くて又、思想の自由が存した。(ibid., p. 76.)。希臘人の指導者は僧侶に非ずして、哲學者であつた。哲學者は人間及び神々の本性の兩者に透入し、世界及び人類の起源を深く探らんことを欲した。彼れ等は、總べての本性を唯一の原理に、又、宇宙の現象を一の法則に歸せんことを努めた。彼れ等は、行爲の單一なる準則の中に總べての道德上の義務及び眞の幸福の妙諦を包含せんことを企圖した。(ibid., p. 77.)。

コンドルセーに從へば、希臘人は政治的自由の觀念を有して居つたが、而も是れ等の觀念は人間の權利に基くものではなくして、各階級の權利の上に基礎を有するものであつた。彼れ等の立法者等の目的は未だ理性の上に、萬人が平等に自然より收受せる權利の上に、普遍的正義の準則の上に、平等にして自由なる人間社會の堂宇を建立するに存すること能はずして、單に、既に存在しつゝある一社會の世襲的成員が、其の自由を保持し、不正を免れて生活し、而して其の獨立を保證するの力を外に對して發揮する法律を制定せんとするに過ぎなかつた。(ibid., p. 92.)。唯り知識を取得するの力を有する富者は權威を略取して貧民を抑壓し、而して彼れ等を驅つて往々僧主の腕に其の身を投ぜしめたのである。(ibid., p. 93.)。

一國の組織及び其の立法と農工商との相互關係、其の繁榮、勢力、自由に及ぼす是れ等のもの〻影響は、怜悧、活潑にして公の利益を念とする人民の注意を免るゝことを得なかつた。斯くて又、彼れ等の間に於いて、今日では經濟學（économie politique）の名によつて知られてゐる、かの著しく廣博にして有用なる術の最初の形跡が認められる。(ibid., p. 94.)。而も希臘の制度の殆んど總べては、奴隷の存在と、市民の總體を一の公所の中に召集するの可能性を想定するものであつて、是れに由つて、そは近代國家の模範たるを得ざるものである。(ibid., p. 95.)。

第五期は中世の始初に到る古代の續論である。アリストテレースは啻だに總べての學問を抱擁せるのみならず、哲學的方法を雄辯術と作詩術に適用した。彼れの構成せる計畫が愈々廣博と爲るに連れて、彼れは益々其の種々なる部分を分離し而して一層明確に各々の限界を定むるの必要を感じた。而して此の時代よりして哲學者の大部分、

又全流派すら、是れ等の部分の或るものゝのみに自己を限定したのである。(ibid., p. 101-102.)。希臘文明の亞歷山利亞時代に於いては、君主等は、地中海と亞細亞海とを接合する通商に由つて、彼れ等の富と彼れ等の勢力の大なる部分を取得せるを以つて、航海及び通商に有用なる科學を奬勵しなければならなかつた。(ibid., p. 103.)。農業は是れ迄單純なる慣行と少數の規制に限定せられて居り、後者は僧侶によつて人民に傳へらるゝに際して彼れ等の迷信によつて歪曲せられて居つた。そは希臘人に於いて、而して尙ほ其れよりも以上に羅馬人に於いて、尊重せられた重要技術と爲り、而して最大なる學者が其の慣習及び訓言を蒐集するに努めた。(ibid., p. 109.)。機械的技術は科學と連結せらるゝことゝ爲り、哲學者等は其の作業を檢討し、起源を探求し、歷史を研究し、種々なる地方に於いて研究せられた過程及び成果を記述し、其の觀察を取り纒め、而して後世に之れを傳達するの業に從事した。(ibid., p. 110.)。

希臘諸共和國の滅亡は又政治科學の滅亡を來さしめた。プラトーン、アリストテレース及びクセノフォーンの後に於いて、是れ等のものは殆んど哲學の體系中に包含せらるゝことなきに至つた。(ibid., p. 120.)。印度及び支那を除外するならば、羅馬市は其の帝國を、人間の精神が其の最幼年期の虛弱を脫却せるあらゆる國民の上に擴張した。羅馬は單一なる都市の爲めに構成せられた政治組織を大帝國に擴張するの必要に驅られた時、不斷の戰役に依るの外、自己を維持することを得ずして、軈がて自己の軍隊によつて破壞せられた。羅馬人の野心は彼れ等をして、羅馬に在つて幸運への道程の一つであつた雄辯術の敎師を希臘に求めしめ、又獨有的にして洗練せられたる享樂に對する趣味、富と閑暇とから生ずる新たなる快感を求むるの念は彼れ等をして希臘人の技術及び其の哲學者等の對話をすら求めしめたのであるが、而も、科學、哲學及び繪畫等に關する技術は羅馬の土壤には適せざる植物であつた。(ibid., p. 122.)。斯くて法律學は吾人が羅馬人に負ふ唯一の新科學である。(ibid., p. 125.)。

被征服國の人民、不幸なる者、熱烈にして而も薄弱なる想像力を有する人々は、好んで司祭の宗敎（religions sacerdotales）に執着するに至つた。蓋し、支配的地位に在る僧侶の利益は、かの奴隷の狀態に在つての平等、現在的財產の拋棄、盲目的服從に對し、受難に對し、任意的にして且つ辛抱强く忍受する苦行に對して保留せられた天國に於ける報酬の敎理を彼れ等に鼓吹したが爲めである。斯くの如き敎理は抑壓せられた人類に對して著しく魅力的なるものであつた。(ibid., p. 132.)。埃及及び猶太の二十宗派は協力して帝國の宗敎を攻擊したのであるが、而も相等しき激しさを以つて互に相鬪ひ、遂にイエスの宗敎の勝利に歸したのである。是れ等のものゝ遺物から、漸次、かの宗敎的幻想家の集團を糾合せる歷史、信條、儀式、敎訓が組み立てられたのである。(ibid., p. 133.)、帝國が其の勢力愈々微弱と爲ると共に、基督敎は愈々急速なる發達を遂げた。(ibid., p. 133-134.)。新宗敎の精神は頽廢と禍患の時代に適合するものであつた。(ibid., p. 134.)。人智の侮蔑は基督敎の主たる特性の一であつた。それは探求と懷疑の精神を恐れた。自然科學は奇蹟の成功に對する危險なる敵と看做された。斯くて基督敎の勝利は、科學及び哲學の兩者の完全なる衰頽の信號であつた。(ibid., p. 135.136.)。

亞歷山利亞時代が衰へ出した時、哲學者と科學者とは、文法家と批評家とに其の地位を讓つた。亞歷山利亞の圖書館は是れ等の人々によつて充された。そはあらゆる書籍の推稱し且つ信賴し得るの程度を其の時代の古るさと之れを了解し發見するの困難に準ぜしめ、諸意見を其れ自身に據ることなくして、其の著者の名聲によつて判斷し、彼れ等の信念を理性よりも寧ろ權威に基かしめた時代、略言すれば、かの人類の衰頽及び古代の卓越を認むる甚しく誤れる有害なる觀念の行はれて居つた時代であつた。(ibid., p. 141.)。

五

第六期は、人間の精神が其の上昇せる高所から急激に下降せる不祥なる中世初期である。司祭の暴虐と武人の專横との間に壓搾せられた歐羅巴は、新たなる文化が自己を自由と人道と德義とに再生せしむる時機を血と涙の裡に待つた。(ibid., p. 144.)。而も、此の間に於いて家内奴隷は潰滅を見た。耕作地の隷民は征服者の土地を耕作した。此の被壓迫階級によつて彼れ等の邸宅は僕婢を供給せられた。從つて、彼れ等は戰爭によつて奴隷を求めずして、土地と植民地とを求めたのである。基督教道德の一部を構成せる一般的同胞愛の原理も亦、奴隷制度を非議し、而して、僧侶は此の一事に於いては、毫も箴言に背反す可き政治的利害を見なかつたが故に、其の說教によつて、他の出來事及び風習が必然成し遂げた筈の潰滅に助力した。這般の變化は人類の運命に於ける革命の萠芽たることが明かと爲つた。彼れ等は眞の自由の知識を之れに負ふものである。然しながら、個人の境涯に及ぼす其の影響は、初めは殆んど感知せられなかつた。(ibid., p. 146-147.)。

西洋に於いては、政治的には、此の時代は封建的無政府狀態(anarchie feodale)と稱せらる可きものであつて、人民は、國王、將軍及び僧侶の三重の暴政下に呻吟して居つたが、而も、這般の無政府狀態は其の胎内に自由の種子を宿して居つた。(ibid., p. 152.)。單一なる專制君主の下に結合せられた東洋に於いては、衰頽は西洋に比して緩慢であつて、且つ久しきに亙つて、さまで一般的ではなかつたが、而も理性の黎明はコンドルセーの時代に到るも猶ほ來らなかつた。(ibid., p. 152, 145.)。コンドルセーは其の教理に於いて最も單純であり、其の宗禮に於いて虛妄最も少なく、其の原理に於いて最も寬大なるマホメット教の出現に就いて物語り、又亞剌比亞人の文化史上の功績を說く。(ibid., p. 160-165.)。

第七期に入つて、重いみじめな鎖に縛されて永遠に壓し拉がれたかのやうに見えた人間の精神を次第に回復せしむる種々なる原因が作用した。(ibid., p. 166.)。國王と領主との間に生じた爭鬪に於いて、國王は特權に依り若しくは人間の自然權の或るものゝ還付に依つて、大都市の援助を確保した。是れ等のものは解放によつて市民權を享有する者を增加せんことを努めた。自由に再生した是れ等の人々は、法律及び歷史の研究に依つて、封建的暴政の武力と對重せしむるに資す可き堪能議論の典據を取得することが彼れ等に取つて如何に肝要であるかを知覺した。皇帝と法王との間に存した拮抗は、伊太利亞が單一支配者の下に結合することを妨げ、而して此の地に於いて多數の獨立社會を存續せしめた。是れ等の小邦に於いては、說得力を兵力に加へ、武器と等しく頻々として談判に訴へることが必要であつた。而して這般の政戰は本來意見の戰ひに基くものであり、又、伊太利亞は斷じて絕對に研究に對する好尙を失ふことがなかつたが爲めに、そは歐羅巴に關しては、知識の中心地と看做さるゝを得可きものである。領主を衰微せしめ窮乏せしむるに由つて自由に資するものであつた十字軍は、又、歐羅巴人と亞剌比亞人との關係を擴張した。(ibid., p. 171-173.)。伊太利亞に於いては諸共和國が形成せられ、獨逸に於いては一定の都邑は殆んど完全なる獨立を取得して、其の固有の法律によつて支配せられ、瑞西の或る地方に於いては人民は封建の鐵鎖並びに國王の權力をも排除し、而して、殆んど總べての大國に於いては、國用金を徵收し新法を制定するの權能が、時には國王と貴族と僧侶と人民との間に、又時には國王とバロンと庶民との間に分割せられた未完全の憲法が發生した。(ibid., p. 173-174.)。

ユスチニアヌス法典寫本の發見は法規並びに法律學の研究を甦らせた。通商は著しく進步した。政治、立法、公經濟は猶ほ未だ學問に轉化せしめらるゝことなく、其の原理は探求せらるゝことも、深く究めらるゝことも、又展

開せしめらるゝことともなかつたのであるが、而も、經驗によつて啓蒙せらるゝに到つた時、之れに導く可き觀察が集注せられた。スコラ哲學は眞理の發見を來さしむることがなかつたが、而も、そは精神を研磨し、而して最初は論敵を混亂せしめ若しくは其の罠から逸脫するが爲めに使用せられた裝置は、哲學的分析の第一泉源であつた。(ibid., p. 176-177.)。羅針盤の使用は商業の活動力を增加し、航海術を改良し、後に至つて吾人に新世界の知識を與へたる航行の想念を示唆し、而して人をして其の居住する地球の全範圍を踏査することを得せしめた。火藥の發明は又戰術に革命を生ぜしめた。出征は更らに費用大なるものと爲り、富は兵力と均衡することを得て、最も好戰的なる國民すら商工業による利得を以つて戰鬪の手段を準備し確保するの必要を感じた。鐵製の甲冑、騎馬術、槍術、棒術、劍術が貴族をして人民の上に優越せしめた所のものは、完全に打破せられた。而して這箇人類の自由と其の眞の平等に對する最後の障碍物の除去は、初め人類の絕滅を來さしむるの虞れあるかのやうに見えた發明の結果であつた。(ibid., p. 179-180.)。

コンドルセーを以つて觀れば、人權が自然の書典に記載せらるゝ所であり、而してあらゆる他のものに諮詢するは之れに背離し、之れを侮辱するものであることは何等の疑問をも容るゝの餘地なき所である。而も、當時に於いては、是れ等の諸權利を推斷す可き箴言及び範例が求められたのは、唯り、聖書、尊敬せられた著者の書籍、法王の上諭、國王の勅書、慣習の集錄、敎會の記錄に於いてゞあつた。命題は其の眞なるが爲めに採用せられずして、そが斯く斯くの書籍に記載せられ、而して斯く斯くの國及び斯く斯くの時代に於いて受け容れられたが故に採用せられたのである。(ibid., p. 82.)。斯くて、人の權威は、到る所に、理性の權威に代つた。書籍は自然よりも遙かに多く研究せられ、又宇宙の現象よりも寧ろ古代の意見が研究せられた。(ibid., p. 183.)。

六

第八期は、印刷術の發明より第十八世紀に亙るものである。印刷はあらゆる著作の部數を僅少なる經費を以つて無限に增加する。印刷術の發明に由つて、知識は活潑、普遍なる商業の目的物と爲つた。(ibid., p. 186.)。是れに由つて散在せる國民に寄語するの術が取得せられ、輿論の構成が可能と爲つた。(ibid., p. 187.)。人民の敎育を政治的及び宗敎的の鎖から解放したものは印刷術ではなかつたか。印刷術の發明以前に於いては、單に數部の寫本を破毀して、一定著作の復活を永く防止することは敢て困難ではなかつたのであるが、其の紙片を印刷に附することの自由なる世界の一隅が存する限り、各人が靜かに獨り書籍より取得する敎育は、斷じて一般に汚損せらるゝことなくして、十分に保證せらる可きである。(ibid., p. 190-191.)。

印刷術の發達と殆んど時を同じうして他の二大事件が起つた。其の一は知識の進歩の上に直接の影響を及ぼせるものであり、他の一が全人類の運命に及ぼせる影響は永く盡くるの期なかる可きものである。即ち、土耳古人によるコンスタンチノープルの占領と、新世界並びに歐洲をして亞非利亞及び亞細亞の東部と直接交通を開かしめたる航路の發見が是れである。希臘の文人學徒は韃靼人の支配から逃れて、伊太利亞に避難所を求めた。(ibid., p. 192-193.)。ガマやコロンブスの如き大膽不敵なる人々は歐洲の爲めに宇宙の限界を擴張し、新たなる蒼空を顯示し、而して未知の國土を展開した。(ibid., p. 194)。人間が其の棲息する地球の知識を取得し、自然的原因若しくは社會制度の長い影響によつて改變せられた人間種屬を其の總べての地方に於いて研究し、而して總べての溫度、總べての氣候に於ける陸海の生產物を注意したのは漸くにして此の期に於いてゞあつた。從つて、是れ等の生產物が人間に與ふる無限なる種類の資源、是れ等の物件に關する知識が諸科學に加へた新たなる眞理若しくは是れに由つて

破壞せらる可き流布久しき誤謬、產業及び航海に對し、又必然的連繫によつて總べての技術及び科學に對して新生命を與へたる商業的活動、及び暴君に反抗するが爲めに自由民に對し、又、鐵鎖を破壞し少くとも封建制度から自己を解放するが爲めに隷屬民に與へられた力――是れ等のものは這般の發見の好結果中に包含せらるゝを得可きである。(ibid., p. 195-196.)。

ルッターは、愕然たる人民に向つて、加特力教的諸制度が基督教の如何なる部分をも構成するものではなくして、却つて其の腐敗及び恥辱であり、而してイエス・キリストの宗教に忠實なるが爲めには、彼れの司祭の其れを誓絶することが先づ第一に必要であることを聲明した。(ibid., p. 198.)。然しながら、宗教改革家を鼓舞した精神は眞の思想の自由を齎すことがなかつた。各々の教義は、其の優勢を占めつゝある國家に於いて、一定の意見に對する外は、何等の宥恕をも行ふことがなかつた。新教徒は、最大なる矛盾に陷ることなくして、吟味の權利を、餘りに狹隘なる境界内に縮少することを得なかつた。蓋し、彼れ等の分離の正當は、這般の權利の上に基けるが爲めである。彼れ等は理性に對して其の自由の總べてを還付することを拒んだが、少くとも其の牢獄が狹隘の度を減ず可きことを承認した。鎖は破毀せられなかつたが、而も、そは重さを減じて、期間を延長した。斯くて、吾人は人間に對して又はなく、基督教徒に對して一種の思想の自由が歐羅巴に誕生したことを見るのである。(ibid., p. 206-207.)。

伊太利亞の諸共和國、英國及び佛國を動搖せしめた庶民運動及び革命は、國憲、法規、公施設が、人民の自由、國家の繁榮、兵力、其の獨立と其の政體の維持の上に惹起す可き結果を觀察し且つ豫知するより成る政治學の一部門に哲學者の注意を向はしめた。(ibid., p. 120.)。經濟學（science économique）は未だ存在しなかつた。君主は人間の數を算へずして、兵士の數を計つた。財政は、暴動を來さしむることなくして人民を劫掠するの術に過ぎざるものであつた。而して、政府は商業に課するに租稅の重荷を以つてし、特權によつて之れを拘束し、若しくは其の獨占を爭ふの外、之れに對して何等の注意をも拂ふことがなかつた。(ibid., p. 211.)。此の時期は、他の如何なる時期よりも、大兇暴によつて汚瀆せらるゝこと多きものである。そは宗教上の虐殺、聖戰、新世界の住民殲滅の時期であつた。吾人は此の時期に於いて古代の奴隷制度が、更らに非文明的なる性質を以つて、復活せしめられた事實を觀る。其の創傷に苛立たせられて狂信の怪物は、其の殘忍性を增加し、而して其の犧牲を積み上ぐるに急であつた。嬲がて理性が其の手から是れ等のものを逸脫せしむ可きを恐れたが爲めである。(ibid., p. 214.)。

科學の行進は急速にして且つ華々しかつた。(ibid., p. 215.)。科學、哲學、法學に關し、又歷史に關しても大體に於いて、專ら羅典語を以つて記述するの習慣は漸次其れ其れの國家の普通語を使用するの習慣に其の地位を讓つた。(ibid., p. 221.)。各個國家の人民が別箇の言葉を話す際に、總べての國家に在つて同一なる一種の學問語の存在は、人間を兩階級に分割し、偏見及び誤謬を人民の間に永續せしめ、眞の平等に對し、同一理性の平等なる使用に對し、必要なる諸眞理の平等なる體得に對して永遠の障碍を置けるものである。(ibid., p. 222.)。此の期間に於いては、人間の精神は猶ほ自由ではなかつたが、而もそは其の自由たる可く形成せられたことを知つた。(ibid., p. 231.)。

七

第九期はデカルトの時代より佛蘭西革命に到るものである。風俗習慣は其の殘忍性を存續せしめた偏見の衰頽に由り、富をして逃走せしむる强暴と混亂の敵である、かの商工業の精神の影響に由り、日を經ること猶ほ久しからざ

る前代の蠻行の追想に據つて喚起せられた恐怖に由り、平等及び人道に關する哲學的觀念の更らに一般的なる普及に由り、最後に、遲緩なるも而も確實なる文化の一般的進歩の結果に由つて緩和せられた。宗教上の偏執は猶ほ殘存したが、而も、そは其の狂暴性を失つた。あらゆる國に於いて、又、あらゆる問題に關し、政府の施設は輿論の進行に從へるのみならず、哲學の其れにすら隨つた。(ibid., p. 238-239.)。

コンドルセーの筆は所謂「理性の時代」の指導觀念たる人權に關する長き論述に入る。久しき誤謬の後に於いて、不完全若しくは曖昧なる理論の中に彷徨へる後に於いて、政法論者等（publicistes）は遂に人間の眞の權利を認識するに至つた。彼れ等は之れを人間が「感覺あり、推理を形成し又道德的觀念を取得することを得る存體である」と云ふ單一の眞理から演繹したのである。(ibid., p. 240.)。勇敢なるシドニイをして其の生命を犧牲たらしめ、ロックによつて其の名聲の權威を附せられた這般の原理は、其の後、ルソーによつて更らに大なる的確さと博さと強さとを以つて展開せしめられた。コンドルセーに從へば、ルソーは實に、最早忘却せらるゝことも、又反駁せらるゝことも不可能なる諸眞理の中に是れ等のものを置けるの名譽を受くるの資格あるのである。(ibid., p. 244.)。

茲にコンドルセーは經濟的自由主義を提唱する。彼れ曰く、人間は欲望と之れに供ふるの能力とを有する、而して種々に變更せられ分配せられた是れ等能力の所產よりして、共同の欲望に應ず可き富の集團は生ずると。(ibid., p. 244.)。是に於いて乎、人間は完全なる自由を以つて其の能力を使用し、其の富を處分し、其の欲望に供ふ可きである。各社會の一般的利益は、此の點に於いて人間の行動を制限することを命ぜずして、却つて之れを制限せんとする企圖の總べてを禁止する。而して、此の公秩序の部門に於いては、あらゆる人に對して彼れが自然より取得せる諸權利を保證するの注意が唯一の有利なる政策であり、總意（volonté générale）が個人の上に正當に行使し得る唯一の權利である。然しながら、這般の原理は公權力が遂行す可き義務の尙ほ殘存することを認める。あらゆる種類の交換に際して、被交換物の重量、容積、分量、長さを確定し、價値の共通の尺度を設くることが是れである。(ibid., p. 246.)。

コンドルセーは重農學派的口吻を以つて、毎年の再生產（reproduction）は隨意に處分し得る部分（portion disponible）を提供する旨を述べる。そは、此の再生產を來さしめたる勞働に對して支拂はる可きものでもなければ、等しきか若しくは更らに豐富なる新たなる再生產を確保す可き所のものに對して支拂はる可きものでもない。斯くの如き隨意に處分し得る部分の所有者は、之れを直接其の勞働に負ふものではない。彼れは其の欲望に應ずるが爲めに日々行はざるを得ざる其の能力の行使から離れて之れを所有する。是に於いて乎、社會的權力が、如何なる權利をも傷くることなくして、國家の安全、其の內部の靜謐、個人の諸權利の保障、法の制定及び實施の爲めに設けられた諸職權の行使、要言すれば、公の繁榮維持の費用に取つて必要なる基本を確立するは此の年々の富の隨意に處分し得る部分である。(ibid., p. 247.)。コンドルセーは實に重農學派の單一課稅說を抱懷するものである。

而も、彼れに從へば、社會全般に取つて有利なる作業、施設、制度が存して居つて、社會は之れを設定し指導し若しくは監督するの義務あるものである。此の時代の開始若しくは其の以後に到るも尙ほ、是れ等種々なる目的は、偶然の機會、政府の貪慾、山師の策略、總べての勢力階級の偏見若しくは利害に委せられて來たのである。然るに、デカルトの學徒デ・ウィットは、經濟學が總べての科學と等しく哲學の原理と正確なる計算に從はしめらるゝの必要を感じた。而も、そは、ユートレッヒトの平和が歐羅巴に對して持續的靜謐の見込を與ふる迄は、殆んど進歩することがなかつた。此の時期よりして、是れ迄とは打つて變つて、そは殆んど一般に注意せらるゝ主題と爲つた。而

して、這般の新科學は、スチュアート、スミス、特に又、佛蘭西經濟學者等の努力によつて忽ちにして顯著なる發達を遂ぐるに至つた。(ibid., p. 247-249.)。無制限の自由を以つて商業及び產業に對する最も確實なる奬勵と看做し、甚だしく不平等なる課稅の屈辱的羈絆より人民を脫却せしめ、之れに代るに、公正、平等にして且つ殆んど負擔を感ずることのない租稅を以つてせんとするの原理は、佛蘭西經濟學者によつて熱烈に唱道せられた。(ibid., p. 261-262.)。

、英才が哲學、政治及び公經濟を發達せしめ、有識人士によつて或る程度迄採用せられた新眞理は、更らに一層遠く其の有益なる影響を及ぼした。(ibid., p. 263.)。啓蒙は普及した。而して其の窮極は亞米利加及び佛蘭西の革命であつた。コンドルセーを以つて觀れば、亞米利加人は、實に、初めて、總べての拘束を脫却し、其の幸福に資すること最も大であると信じた憲法及び法律を靜に自己の爲めに制定せる偉大なる人民である。(ibid., p. 272.)。佛蘭西革命は亞米利加の其れに比して更らに完全なるものである。蓋し、亞米利加には改革す可き不完全なる課稅制度なく、封建的暴虐なく、世襲的差別なく、富裕にして强大なる特權的團體なく、又、宗教的不認容の制度も存することがなかつたが爲めに、亞米利加人は單に英國政府に代る可き新政府の設立に其の注意を限定せるに反し、佛蘭西に於いては、革命は、反對の理由に據つて、社會の全經濟を悉く抱擁し、あらゆる社會關係を悉く變更しなければならなかつたが故である。(ibid., p. 275-276.)。

自然科學は急速に進步して、政治學、倫理學及び宗教上に於ける謬妄の見を破壞するの結果を來した。「政治學、倫理學に於ける誤謬の總べては、哲學的誤謬に基礎を有し、而して哲學的誤謬其の者は物理的誤謬に連結せられてゐる。自然の諸法則の無識に基かざる宗教的制度、超自然的不條理は存することがない」。(ibid., p. 309.)。

八

第十期は人類の將來に關するものである。コンドルセーは、人類の歷史の歸結に據つて、其の將來の運命に關する繪畫を幾分の眞實性を以つて描かんとする。(ibid., p. 327.)。人類將來の狀態に關する期待は三要點に歸せしめらるゝを得可きである。諸國民間の不平等の破壞、同一人民の間に於ける平等の發達、最後には、人間の眞の完成が是れである。(ibid., p. 328.)。現在に到る迄、總べての文明國民に在つて、其の各々を構成する種々なる階級の間に於いて認めらるゝ知識、手段若しくは富の相違、最初の社會進步が擴大し、又、言はゞ、生ぜしめた不平等は、文明其の者に屬するに非ずして、社會的技術の現實の不完全に屬するものである。そは社會的技術の主要目的たる實際の平等に地位を讓るが爲めに絕えず弱められなければならぬ。(ibid., p. 329.)。人類は科學及び技術に於ける新發明と其の必然的結果たる一個人の福祉及び共同の繁榮の手段に於ける新發明に由り、又、行爲原理及び實踐倫理に於ける進步に由り、最後には又、吾人の諸能力の强度を增加し其の行使を指導する用具の改善若しくは自然的組織其のものゝ改善の結果たる可き知識的、道德的及び肉體的能力の眞の改良に由つて善化せらるゝであらう。「前記三個の問題に答ふに當つて、吾人は、過去の經驗に由り、科學と文明とが是れ迄に爲し遂げたる進步の考察に由り、又、人間精神の前進と其の能力の發達の分析に由つて、自然は吾人の期待に對して何等の極限をも設くることがなかつたことを信ず可き最も强大なる理由を看出す可きであらう」。(ibid., p. 330-331.)。

此の地球の現狀を觀測する時は、吾人は先づ第一に歐羅巴に於いては、佛蘭西憲法の原理が、あらゆる有識人士によつて承認せられたが爲めに、總べての人種及び國民の平等が存す可きことを認む可きである。奴隸制度及び獨占的特許會社廢止の結果として、歐羅巴人と植民地住民との間の平等を見るに至る可きである。歐羅巴の國民は、

遂に、排他的會社が、其の政府に暴政の新たなる手段を與ふるが爲めに、彼り等に賦課せられたる租稅に外ならざることを知る可きである。是れ迄、是れ等商事會社の富を增大するに資せる植民地は、本國に於いては追求し得ざる安樂を是れ等好氣候の地に於いて求めんとしつゝある勤勉なる人々によつて居住せらるゝことゝ爲る可きである。(ibid., p. 331-334.)。植民地の原住民は、文明國民によつて驅逐せらるゝに從つて、其の數を減じ、遂には全然滅亡するか、然らざれば、其の僅少なる殘存者は彼れ等の隣人と混和するに至る可きである。(ibid., p. 336.)。而して、歐洲人は、亞非利加及び亞細亞の住民に對しては、有用なる道具、若しくは寬大なる救濟主と爲り、是れ等の地方に、歐洲の自由と文化と條理の原理と範例を移植す可きである。(ibid., p. 333, 334.)。斯くて、自由にして其の理性以外に如何なる主人をも承認することなき自由民のみを太陽は地上に於いて照し、又、暴君と奴隷、僧侶と其の愚鈍なるか若しくは僞善的なる道具とは、最早歷史と劇場に於けるの外は、存することなかる可き時機が到來す可きである。(ibid., p. 338.)。

コンドルセーの意見に據れば、一國の個人的成員の間に存する差別は、(一)富の不平等、(二)其の生存の資源が自己の爲めに確保せられ、其の家族に傳へられ得る者と、其の資源が彼れの生命の存續期間に依存するか、若しくは寧ろ彼れが勞働に堪へ得る其の生涯の一部の存續期間に依存する者との間に存する狀態の不平等、(三)最後には、教育の不平等の三主要原因に歸せらるゝを得可きものである。(ibid., p. 339.)。是れ等三種の實際の不平等は絶えず減少しなければならぬが、而も之れを破壞せんと考ふるは不合理であるばかりでなく、又危險である。蓋し、是れ等のものは自然且つ必然なる原因を有するが故である。然しながら、市民法が資產を永續せしめ集合する不自然なる手段を導入することなく、商業及び產業の自由が行はれて、總べての禁止法及び課稅權が必然富者に與へたる利益を消滅せしめ、契約に對する課稅、其の自由に對する制限、之れに要する面倒なる形式、最後には、其の履行に伴へる不確實と必要なる費用が貧民の活動を阻止し、又、彼れ等の僅少なる資本を消滅せしむることなく、公行政が一定の人に對して富の豐富なる泉源を開き、自餘の市民に對して之れを閉づることなく、又、高齡に附隨せる偏見と貪慾とが結婚を支配することがなかつたならば、資產は自から平等に向ひ、而して其の過度の不權衡は存せざるに至るか若しくは急速に減少す可きである。(ibid., p. 340-341.)。老人及び寡婦孤兒を扶助し、而して貧靑年に對して資金を貸與するの施設は又不平等を除去するに資する所大なる可きである。コンドルセーは、這般の施設を以つて、社會的權力若しくは個人の組合の孰れかに依つて組織せらるゝを得可きものと思惟した。(ibid., p. 342-344.)。其の他尙ほ這般の平等は、信用が永く大資產に專屬せる特權として存續することを防止すると共に、之れを堅實の度に於いて劣れる基礎の上に置くことを避け、又、產業の進步、商業の活動をして更らに大資本家の存在より獨立せしむるに由つて確保せらるゝを得可きである。(ibid., p. 344.)。

コンドルセーは、教育の不平等を以つて、社會のあらゆる成員に對して教育の限度を擴張するに依つて減少せら る可きものと觀た。彼れの意見に據れば、平等の種々なる原因は孤立せる態樣に於いて作用することなく、是れ等のものは相合體し、相混入し、互に相支持し、而して其の結合せる結果よりして、更らに强大、確實且つ不斷の作用を生ずる。教育が更らに平等であるならば、是れに由つて勤勞は更らに大なる平等を取得し、更らに是れに由つて又、資產は一層平等と爲り、而して、財產の平等は必然教育の平等に貢獻する。(ibid., p. 348.)。現在に於いては、最も開明なる國家に在つてさへ、自然によつて才能を賦與せられたる者の五十分の一も、之れを發達せしむるに必要なる教育を受けでゐない。將來に於いては、科學の境界を擴張す可く運命づけられた人の數は著しく相違し

なければならぬ。(ibid., p. 353.)。科學の進歩は教育技術の進歩を確保し、教育技術の進歩は又驀がて科學の進歩を促進する。而して這般の相互的影響は、人類改善の最も活潑にして最も强大なる多數の原因中に伍せしめられなければならぬ。(ibid., p. 372.)。

而して、コンドルセーは、科學の進歩並びに之れより分離す可らざる諸技術の進歩に依賴して、絶えず人口稠密の度を高めつゝある土地の面積は、愈々有用なるか若しくは愈々貴重なる消費財の大量を生産するに至る可きことを期待したのである。是に於いて、愈々益々狹隘なる土地は更らに大なる效用若しくは更らに高き價値の産物の集積を生産するに至らしめらる可く、より小なる消費を以つて、より大なる享樂は取得せらる可く、同一の製造品は、より小なる原産物の破壞に對して與へられ、又より長く使用せらるゝを得可きである。斯くて、啻だに同一面積の土地が更らに多くの個人を養ふ可きのみならず、各個人は勞する所更らに少なくして、更らに生産的なる方法に於いて勞作し、而して更らに好く其の欲望を滿足するを得可きである。然しながら、人間の能力と其の欲望との間に更らに有利なる割合を生ず可き這箇勤勞と幸福との進歩裡に在つて、相次げる各世代は更らに多樣の蓄積を所有し、人口は著しく增加し、而して是れ等の改善と增加の原理は、其の不斷の作用に由つて、遂には類廢と破壞とを來すことがありはしなからうか。人口の增加が其の生存資料の增加よりも大であり、縱し、禍祉と人口との持續的減少を來し、眞に後退を行はないまでも、少くとも吉凶間に於ける一種の搖動を來さしむるの時代が終には到來しなければならぬのではあるまいか。此の時期に到達せる社會に於ける這般の搖動は、或る程度まで週期的なる窮乏の常住の原因ではあるまいか。そは、あらゆる改善が不可能と爲る可き限界を劃し、人間種屬の完全性が、無數の世紀中に到達し得る所ではあるが、而も、斷じて之れを超えて進むこと能はざる段階を劃するものではあるまいか。

(idid., p. 355-357.)。

然しながら、コンドルセーは、斯くの如き時が、何時かは到來しなければならぬとしても、そは必然頗る遠い年代に於いてゞなければならず、又、其の間に於いて、人類は、確然、吾人が現在に於いて殆んど何等の觀念をも形成することを得ざる知識と開明の程度に到達す可きであると考へた。彼れは問うた、何人か、他日、元素を變じて人間の使用に適する實體たらしむるの術によつて齎され得可き所のものを敢て豫想せんとするかと。(ibid., p. 357-358.)。而して、縱令ひ、人口が結局、自然によつて冷酷に此の地球上に置かれた這般の限界に到達するが如きことがあつたとしても、吾人にして若し此の時期に先き立つて、理性の進歩が科學の進歩と相並んで行進す可きこと、迷信の無稽なる偏見が道念中に、之れを淨化し上昇せしむることなくして却つて之れを汚辱し墮落せしむる峻嚴を注入することなきに至る可きこと、人々が猶ほ未だ存在することのない被造物に對して義務を有するならば、斯くの如き義務は是れ等のものに存在を與ふるに非ずして、幸福を與ふるに存し、而して這般の義務の目的は、人間種屬若しくは彼れ等の生活する社會、彼れ等の屬する家族の一般的安泰であつて、此の地球に負はしむるに無用且つ不幸なる被造物を以つてせんとする幼稚なる觀念に非ざることを、人々が悟了す可きことを想像するならば、人類の幸福若しくは其の無際限なる完全性の孰れに對しても恐る可き何物も生ずることがないであらう。斯くて、生存資料の可能なる高に對し、從つて又、最大可能なる人口に對して限界が存し得可きであるが、而も、生を享けたる被造物の甚しく自然に反し、社會的繁榮に背ける早期の破壞は之れよりして生ずることがないであらう。(ibid., p. 358-359.)。即ち、コンドルセーは、生存資料の問題が技術及び科學の進歩によつて解決せられなかつたとしても、人口は産兒制限によつて抑制せらる可きであつて、墮胎及び殺兒の殘忍野蠻なる方法によつて過剩人口

を減少せしむるの必要は存せざる可きものと觀たのである。

コンドルセーは又、保健藥の進歩、更らに健全なる食物及び住宅の使用、適度の運動に由つて體力を發達せしむ可き生活方法、最後には、衰頽の最能動的なる二原因、即ち困窮と過大なる富の廢滅が、病患を滅絶し、人間の生命を無限に延長す可きことを信じた。疑ひもなく、人間は不死と爲ることはないであらうが、而も、彼れが生を享けた瞬間と、彼れが疾病なく、事故なく、自然に、生存するの困難を感ずる普通の時期との間の隔りは必然絶えず增加せらるゝを得可きである。(ibid., p. 379-381.)。此の點は往々、本著を酷評する者によつて、此の最も愚劣なる書の最も妄想的なる部分と嘲笑せられた所であるが、而も、人間は知力の進歩と共に、其の生命を延長することを得て、恐らくは不死に達することすらあり得可きであると想像せるゴッドウィンに比する時は、寧ろ空想的分子を含むこと少なきものと稱するを得可きである。(William Godwin, An Enquiry Concerning Political Justice, and its influence on general virtue and Happiness, vol. ii, 1793, p. 871.)。

斯くて、彼れは、暮色迫る大伽藍裡に響く祝禱の聲にも似たる莊嚴なる語を殘して、人類進歩の赫しき歷史繪卷を終る。

九

アレヴィ（Elie Halévy）は、進歩理論及び歷史哲學の想念を以つて、第十八世紀思想に對する、換言すれば啓蒙哲學に對する反動に基けるものと看做すジョン・スチュアート・ミルの見解を信ず可からざるものと論じ、サン・シモン學徒及びオーギュスト・コントは其の進歩の哲學をチュルコォ及びコンドルセーに負ひ、而して、ジェームズ・ミルは、其の文筆に從事せる最初よりして、彼れが根本的のものと信じた學說、即ち、人間種屬は本質的に完成せられ、若しくは進歩し得るものであると云ふ學說を、恐らくハートリィ、プリーストリィ及びゴッドウィンに對すると少くとも等しく、コンドルセーに負ふものであらうと說いてゐる。(The Growth of Philosophic Radicalism, trans. by Mary Morris, 1928, p. 274.)。而してコンドルセー自身は、人間種屬の無限の完全性に關する學說の最初にして且つ最著名なる使徒を以つて、チュルゴォ、プライス及びプリーストリィと做してゐる。(Esquisse, op. cit., p. 267.)。サン・シモンは一般的知識の過去及び現在の歷史を著さんとするの考へを初めて懷いた者はコンドルセーであつたと記してゐる。唯だ彼れは、コンドルセーの計畫は崇高ではあつたが、其の實行は無價値であつたと觀てゐる。(Correspondance avec M. de Redern.——Oeuvres de Saint-Simon et d'Enfantin, XV, 1868, p. 113-118.)。コントは又、コンドルセーの『下圖』に於いて、人類の社會的進歩の科學的想念は遂に明確に表明せられたと讃美して居つた。(Auguste Comte, Cours de philosophie positive, 1835-1852, iv, p. 252-263.)。而して、後年、歷史學派の勃興と共に、經濟學上次第に重視せらるゝに至つた國民經濟發達の階段說、即ち、文明國民の當然經過し來る可き標準的發達階段を發見せんとするの企圖は又、An Essay on the History of Civil Society, 1767. の著者アダム・ファーガソン（Adam Ferguson）及び彼れコンドルセーに於いて其の先驅者を看出し得可きである。

十

本書初版は八ツ折判三百八十九頁より成る。初版出版の年は諸權威によつて、或ひは一千七百九十四年と記され、或ひは一千七百九十五年と錄されてゐる。斯くの如き相違を生じたことは恐らく初版本が其の扉に「共和國第三年」（L'an III. de la République.）と誌せる所より生じたものであらう。本書は幾度びか版を重ね、一千七百九十八年には早く第四版を出し、又一千八百〇四年版二十一冊本全集並びに一千八百四十七—九年版十二冊本全集中に加へ

られてゐる。現在に於いては、本著は、此の最後のもの、即ちオーコンノル（A. Condorcet O'Connor）及びアラゴー（M. F. Arago）編纂の Oeuvres complètes. の第六卷所收のものより引用せらるゝ場合が最も多いやうである。

本項中には、コンドルセーの肖像及び自署並びに『下圖』初版の扉を複寫して掲げることゝした。

Oswald Dutch, Germany's Next Aims, 1939.

山本　登

昨年三月の墺太利合邦、九月のズデーテン併合、次いで今年三月の全チェコ强壓的解體と、歐洲に於ける獨逸の進出擴大は誠に目覺しきものがあり、爲めに歐洲全土は震撼するに至つた。獨逸の次の攻勢は何處の地に向けられるであらうか、其の鉾先は多年の懸案たるウクライナに向ふか、或は更にバルカンを南下するか、又は一轉して波蘭に當り、ダンチッヒ自由市及廻廊地帶の還附要求となるか、「獨逸の次の目標」は正に世界的關心の對象となつた。此の關聯に於て、先づ俎上に載せられたのは、其の第三のものであつた。玆數箇月來、此の問題を巡つて獨・波關係は頓みに惡化し、他方英國を首班として、佛・蘇其他中歐諸小國を誘つての對獨包圍陣形成の劃策は、最近に於て英・佛・蘇三國軍事同盟締結への努力に迄發展を見せたが、何故か蘇聯の態度に煮えきらぬものが看取せられた。

斯くして歐洲の情勢は著しく緊張を示し、波蘭を間に狹んで獨・伊對英・佛・蘇の對立が漸次爆發點に近付きつゝあると見えた時、又してもヒットラーの切札的行爲として、世界各國の啞然たる裡に、突如として去る八月十九日獨・蘇新通商協定の成立が發表せられ、引續き二十四日兩國間に十箇年の期限を以て不侵略條約が調印せられた。此の